

Davies, P., 2000, “Contributions from Qualitative Research,” Davies, H. T. O., Nutley, S. M. and Smith, P. C. eds., *What Works? Evidence-Based Policy and Practice in Public Services*, Bristol: Policy Press, 291-316.

P. デイヴィス「質的研究による貢献」H. T. O. デイヴィスほか編『何が有効か？——公共サービスにおけるエビデンスに基づいた政策と実践』

#### レジュメ作成者による紹介

公共サービスにおけるエビデンスに基づく政策や実践に関する論考を集めた論文集。とりあげた章では、いわゆる質的な研究やデータが、公共サービスの評価以外にもどのような形でエビデンスに基づく政策や実践に貢献しうるのかが整理されている。

#### 導入 (pp. 291-292)

- 質的および量的なデータは、ともに社会科学や公共政策の研究に長らく貢献してきた。しかし、対照実験のデザインを使用した優れた評価研究を求める実践者たちの要求や、ランダム化比較試験（randomised controlled trial：RCT）がエビデンスに基づく実践にとって最も理想的だという数多くの主張は、質的な研究およびエビデンスの価値や貢献を過小評価する役割を果たしてきた可能性がある。
  - RCT やそのメタアナリシス<sup>1</sup>を最上位に置き、その分野の権威による意見や記述的研究を最下位に位置づけるエビデンスのヒエラルキー<sup>2</sup>も、質的研究が量的なデータや知見よりも劣ることを示唆してきた可能性がある。
- 本章では、質的な研究やエビデンスに対するこのような過小評価を正すことを目指す。
  - 具体的には、①質的研究を構成するものが何かを述べ、②エビデンスを構成するものについて再検討し、③質的研究がヘルスケアや教育といった分野における政策や実践にいかんして知識を提供してきたのかを探る。

#### 質的研究とは何か (pp.292-295)

- 質的研究は、社会的世界を研究する方法論的なアプローチの集まり。
  - そこでは、実験環境のもとではなく、自然的な（naturalistic）環境において社会的な活動が研究される。

<sup>1</sup> メタアナリシスとは、統計的な手法を用いて異なる RCT の対象集団を混ぜ合わせる研究方法である。よりくわしくは、社会政策／社会福祉②の第 10、11 回のレビューなどを参照。

<sup>2</sup> エビデンスのヒエラルキーについては、社会政策／社会福祉②の第 10 回のレビューも参照。

- 研究者の客観的なカテゴリーや測定よりも、普通の（ordinary）人びとの主観的な経験により関心が向けられる。
  - 異なる社会・文化的背景をもち、異なる状況にある人びとがどのように自らの生きる世界を理解し、意味を与え、その中で関係を結ぶのか、それによっていかにして社会的現実を構成するのか。そうしたやり方の多様さにとくに注目する。
  - 不変的で一般化できる法則を含む法則定立的（nomothetic）な説明よりも、個別の出来事・活動・社会集団に関する個性記述的（idiographic）な説明により高い関心を向ける。
- 「自殺」の例は、質的・解釈的アプローチと量的・実証的アプローチの対比をわかりやすく説明する。
    - Durkheim の古典的な研究は、自殺による死亡に関する公的統計を社会的事実として扱い、宗教や地理的条件、社会統合の度合いといった他の社会的事実の観点から自殺率のばらつきを分析。
    - 質的・解釈的アプローチは、社会的事実としての公的自殺統計の妥当性に疑問を投げかける。何を自殺とみなし、何を公的統計に含めるかは、検死官や統計を取りまとめる役人の判断、カテゴリー化、分類に依存する。故人の宗教などは、その人の信仰心の厚さや宗教に対して与える意味などによって、その重要性が大きく変わらう。結果として自殺の質的研究では、公的統計が生成される過程や手続き、および公的統計の生成・使用に含まれる解釈や意味の連鎖を探究する傾向にある。
  - 研究およびエビデンスに対する質的アプローチは、社会研究においてのみ見られるものではなく、量的研究・実証主義的研究と相互に排他的でもない。
    - たとえば、疫学や医療統計学の優れた研究においても、医師や検死官による分類の手続きといった質的な要素を考慮に入れる。
  - 質的研究では、インタビューや（実験によってではないという意味で）自然に発生する活動の観察、エスノグラフィー、会話分析・言説分析、テキストの分析、個人的語り・伝記・オーラルヒストリー等々、さまざまな方法を用いる。
    - Denzin & Lincoln（1994）<sup>3</sup>によれば、質的研究では、さまざまな方法のうちの1つを他よりも特権化することはしない。

---

<sup>3</sup> Denzin, N.K. and Lincoln, Y. S. eds., 1994, *Handbook of Qualitative Research*, Thousand Oaks, CA: Sage Publications.

- このように多様な方法があることは、公共政策にとっての質的研究の適切さや適用可能性に疑義を生じさせるかもしれない。
  - そもそも社会学およびその他の社会科学の内部では、社会科学が政策的・実践的な関心事と何かしらの関係をもつべきかどうかについて長い論争がある。
  - そのなかで Bloor (1997)<sup>4</sup>は、社会問題や公共政策に取り組むことは社会研究の正統な目的だと述べたうえで、質的研究には次の2つの長所があるとする。
    - 研究者と対象者の関係が近いと、研究者が提案する実践上の変化について対象者が関心をもって取り組むことが可能になる。
    - 質的研究による日常的な実践の豊かな記述は、それを読む実践者が、自分たちの実践と研究による記述とを並べて比較することを可能にする。これは、政策や実践が依拠する想定や、政策的・実践的な問題が枠づけられる仕方を問い直したり、政策や実践の影響を受ける人びとの見方・活動・優先事項に関する洞察を提供したりすることで、政策や実践に影響を与えうる。

## エビデンスとは何か (pp.295-308)

### 評価のためのエビデンス

- 今日まで、エビデンスに基づく実践における研究の多くは評価<sup>5</sup>に関するもの。すなわち医療、ヘルスケア、教育などの分野における最も有効で効率的な介入について、妥当性や信頼性が高く、レリヴァントなエビデンスの確立を目指してきた。
  - 評価研究はとりわけ、介入 y と比べたときの介入 x の相対的な費用対効果に関するエビデンスを追求する。そのため評価研究では、「アウトカム z の達成のために、介入 x は、介入 y よりも費用効率性が高い（低い）か」といった問いを検討する。
  - この種の問いは、介入以外のすべての要素を一定にした対照試験のデザインか、洗練された統計的コントロールを含む手法を要求する。
- しばしば RCT などの評価手法において質的研究が果たす役割はないとみなされるが、これは不正確である。取り組むべき評価の問いを決定する際、そこにはほとんどつねに質的な問題が含まれている。
  - エビデンスに基づく政策や実践では、適切なデータの収集や最良のエビデンスの確立のために、正しい問いを立てることが決定的に重要。正しい問いを提起するプロセスには、適切な対象は誰か、どのような介入を調査すべきか、その介入に含まれ

<sup>4</sup> Bloor, M., 1997, "Addressing Social Problems through Qualitative Research," in D. Silverman ed., *Qualitative Research: Theory, Method and Practice*, London: Sage Publications, 221-38.

<sup>5</sup> 評価あるいは評価研究とは、一般に、政策や実践の改善に資するために、政策や実践に関する判断をする人々に情報提供をする調査活動のことをいう。

る文脈的・倫理的な問題とは何か、どのようなアウトカムを測定すべきかといった点についての質的な検討が含まれる。

- 新たな研究を計画するのではなく、既存のエビデンスを利用する際にも、エビデンスに基づく実践者は、対照試験やメタアナリシスが行われた特定の条件が、エビデンスを適用するクライアント集団や環境におけるそれと社会的、文化的、文脈的にレリヴァントかどうかを問わなければならない。このような検討にも、質的研究は役に立つ。
  
- 質的研究は、評価研究の外的妥当性の検討にも貢献する。
  - 例：Orford & Edwards (1977)<sup>6</sup>による、アルコール依存症に対する処遇についてのRCT。ロンドン南部のアルコール依存症者を対象に研究を行った結果、カウンセリングを通じてアドバイスの提供などを行った実験群と、1970年代半ばのアルコール依存症に対する「標準的」な精神医学的治療を行った統制群との間で、アウトカムにいくつかの差異がみられた。
  - この結果を、あらゆる場所のアルコール依存症者に対する処遇のエビデンスとして用いるには、RCTに参加した対象についていくつかの問題（アドバイス提供を行ったカウンセラーのスキル、アドバイス提供の際のコミュニケーションが異なる文脈で複製可能か、1970年代半ば以降の「標準的」な精神医学的治療の変化など）を検討する必要がある。この種の検討にも、質的研究が役に立つ。
  
- 質的なデータは、実験群と統制群が試験を始める段階で等しい集団であることを確かめるうえでも重要。
  - 対象者をグループに無作為に割り当てることは、研究の妥当性に影響を及ぼすような変数において等しいサンプルがもたらされることを必ずしも約束しない<sup>7</sup>。
    - 例：飲酒行動の点ではグループ間で等しいが、処置のアウトカムに影響を与えるような対象者の背景がグループ間で異なるような場合。
  - 対照試験を始める段階で、これらの変数を両グループに等しく配分することが達成されているかどうかをテストすること、これらの質的な変数がアウトカムにとって重要かどうか知ることが必要。

<sup>6</sup> Orford, J. and Edwards, G., 1977, *Alcoholism*, Maudsley Monograph No 26, Oxford: Oxford University Press.

<sup>7</sup> ただしRCTにおいては、無作為化にくわえてマスキングを施したり、サンプルサイズを大きくしたりするなど、この種の懸念に対処する手段が用意されている。この点について、著者たちはとくに言及していない (pp.297-298)。関連する内容として、社会政策／社会福祉②の第 11 回のレジュメも参照。

- 適切で妥当性の高いアウトカム尺度を見極めることも、評価研究における質的研究の重要な役割。
  - 最良のエビデンスを確立するうえでの難問の 1 つは、介入による影響を受ける人びとにとってレリヴァントなアウトカムに関して最良のエビデンスを確立すること。例えば、客観的な尺度ではポジティブなアウトカムが得られたとみなされた人びとが、本人としてはネガティブな経験をしたと考える可能性がある<sup>8</sup>（逆も然り）。
  - 測定されたアウトカムの偶発的・文脈的な性質を正しく理解する必要がある。
- 質的研究は、尺度の文脈特殊性を同定することによっても、評価研究におけるアウトカムの測定をよりよくすることができる。
  - 患者の日常生活動作の自立度合いや認知機能、コミュニケーション能力などは、それが病院で評価されたときと患者の自宅で評価されたときとは異なることが知られている。
  - これは、いわゆる「客観的」な尺度の状態を解釈する際に最大の注意を払うことを要請するだけでなく、これらの測定が、異なる現実生活の文脈で得られた観察に基づくエスノグラフィックなデータによって補完・代替される必要性を強調する。

#### 観察に基づくエスノグラフィックなエビデンス

- 評価研究は、1 つのタイプのエビデンスを提供する、1 つのタイプの研究にすぎない。ほかにも、健康・病気およびそれらの管理、教育のプロセスや活動、犯罪行動やその帰結の質的な記述を提供することを目指す研究がある。
  - 質的な社会科学における「観察に基づく (observational)」という用語は、自然に生じる日常的活動の詳細な観察・記録に基づく研究を指す。サーベイやコーホート研究など非実験的な手法を指す量的アプローチにおける用法とは異なる。
  - このような質的研究による貢献の先駆けに位置するのが、Goffman (1961)<sup>9</sup>による精神病院などの施設の詳細な観察。この研究は、精神疾患をもつ人びとの脱施設化に向けた運動と、精神病院をはじめとした「全制的施設」の閉鎖を後押しした。

<sup>8</sup> ただし、このことによって尺度の妥当性が低いとみなされるのは、目指しているアウトカムが介入を受ける本人にとってポジティブな経験をもたらすことであるような場合に限られる点には注意が必要。

<sup>9</sup> Goffman, E., 1961, *Asylums: Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates*, Harmondsworth: Penguin.

- このような質的研究から得られるエビデンスはいくつかの形式をとる。その 1 つとして、公共政策や実践の各分野における日常的な活動が行われるプロセスと、それがさまざまなステークホルダーにもたらす帰結に関するエビデンスがある。
  - 例えば教育分野では、教師やその他の学校職員が、さまざまなカテゴリーや手続きや実践を利用して、教育達成の機会を開放／閉鎖するやり方を、質的研究によって明らかにしてきた。
  - Cicourel & Kitsuse (1963)<sup>10</sup>は、エスノグラフィックな観察と、学校職員および生徒へのインタビューによって、異なる社会経済的背景をもつ生徒がどのようにして高校を通過していくのかを検討。生徒の学業的な能力よりも、生徒の親や家庭環境の違いに応じて生徒たちを異なるやり方で処遇する教師やカウンセラーの実践が、生徒たちの教育上のキャリアを決定づけていることを明らかにした。
  - こうした質的研究は、集約された変数のみについて報告し、その内部に存在する社会的・文化的なばらつきを考慮しない量的研究の限界を示している。同時に、教育達成に見られる統計的なパターンの原因を遺伝的・人種的な特徴に帰属させるような説明にも異議申し立てしている。
- 質的な知見は、量的なデータを補完したり、サーベイの結果を説明したりもできる。
  - 例えば、イギリスやアメリカにおいてエスニック・マイノリティ出身の生徒のなかに優れた教育パフォーマンスを示す者がいることを、サーベイによって追認するだけでなく、既存の質的研究の知見に依拠しながら、その理由を説明する研究もある。
- 観察に基づくエスノグラフィックな研究は、実験や統計的なエビデンスの表面的な水準を超えて、独立変数のように見えるものの内部における差異を同定したり、そうした差異が生じる理由を説明したりすることで、政策や実践に関する貴重なエビデンスを提供する。
  - また、社会構造についての認識や公共政策の秩序立った様相を生み出すうえで制度的・組織的なプロセスが果たす役割についてのエビデンスも提供する。
  - このようなエビデンスを生み出す観察に基づく研究やエスノグラフィックな研究の質を確保するための合意された規準を開発することが必要である。

#### 会話分析・言説分析

- サービス提供に関する情報を与えるのに役立つ質的アプローチのもう 1 つとして、会話分析や言説分析がある。
  - ここでは、制度的／非制度的状況において自然に発生する発話や会話を研究する。

<sup>10</sup> Cicourel, A.V. and Kitsuse, J.I., 1963, *The Educational Decision Makers*, Indianapolis, IN: Bobbs-Merrill.

- 会話分析者は、発話に見られる体系的な仕組みや順番交代の規則が、異なる組織的・制度的状況においてどのように作動しているのかについて一連の経験的なエビデンスを生み出してきた。
- 会話における順番交代および連鎖の仕組みが、会話分析者の中心的な関心。
  - 制度的状況で自然に発生する発話と順番交代についての研究は、「質問－回答」、「挨拶－返答」といった二項的な連鎖からの変異に注意を向けてきた。
  - 例えば、Mehan（1979）<sup>11</sup>は、教室における相互作用が、「教師による開始－生徒による応答－教師による評価」からなる三項の連鎖によって組み立てられていることを発見。3 つ目の評価の連鎖があることで、教師は、生徒による応答を受容する（拒否する）のみならず、それを判定したり、必要であれば修正したりすることができ、それによって授業と教室を統制することが可能になる。
  - 医師－患者間の相互作用に関する研究では、両者の相互作用が非対称的であり、質問のほとんどを医師が行うのに対して、患者からの質問はほとんど行われなことを示す多くのエビデンスがある。このような知見は、治療や助言に対する患者の遵守（アドヒアランス）、治療後の患者の満足度などについて重要な含意をもちうる。
  - このように、会話分析の研究から得られる質的な知見は、エビデンスに基づく実践の提供やその改善のための情報提供の役に立つ。

#### 倫理的問題を知らせるための質的アプローチの使用

- 質的なデータは、特定の政策や実践を追求することが正しい、もしくは正当化できるかどうかを判断する原則や手続きを提供することで、エビデンスに基づく政策や実践に貢献できる。
  - 政策や実践の影響を受ける人びとの価値や優先事項を引き出し、政策策定者や実践者の考慮に入れることは、倫理的に重要。
  - 倫理的に配慮された決定を行うには、集団のニーズや価値、優先事項についての質的・量的なエビデンスが必要。倫理的な決定がエビデンスに基づいていることを保証するためには、サーベイや綿密なインタビュー、道徳的な決定に直面した人びとがどのように行動するのかについての観察といった手法のすべてが必要である。

---

<sup>11</sup> Mehan, H., 1979, *Learning Lessons: The Social Organisation of Classroom Instruction*, Cambridge, MA: Harvard University Press.

### 結語（pp.308-309）

- 量的研究と同様に、質的研究にも限界がある。
  - より一般的な結論を求める場合、通常はそれが質的な探究において重要な「文脈上の意味」や「エスノグラフィックな唯一性」に反することに気づく。それゆえ、質的研究の質を評価する規準を定め、この規準を満たす研究を公共政策や実践のコミュニティにとってアクセス可能なものにすることが重要。
  
- 本章でたびたび言及したように、質的研究と量的研究の異なるアプローチは、エビデンスに基づく政策や実践において組み合わせて利用することができる。
  - 質的研究は、評価研究や実験研究の知見を一般化できそうな（できなさそうな）社会的・文化的・時間的・生態的な条件を特定する役に立つことで、量的研究の価値を高める。
  - エビデンスに基づく政策や実践は両方のタイプの研究を必要とすることから、質的研究と量的研究の相補的な性質がさらに活かされるような知的環境を育てることが必要である。